
ドルチェ (FA/RE/g)

omotenac

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドルチエ（FA/RE/g）

【Nコード】

N0541N

【作者名】

omotenac

【あらすじ】

ロイエド／女体化／下着の話

ロイはかわいい下着が好きだ。

三十路の、それも軍人の男がかわいいのっていったらかなり気持ち悪いっていうか変態っぽいけど、自分で着るんじゃないくて、俺が着てるのを見て、それを脱がせるのが楽しいらしい。

現に今だって、俺のシャツのボタンをはずして、その下にはすぐブラだから、見るとすごく嬉しそうな顔をした。

「珍しい色じゃないか」

今日着てきたのはこの間買ったばかりのショーツとのセット。上下ばらばらな下着は色気がないって言われて以来、ロイとそういうことするってわかる日は気をつけて下着を選んでる。そうでなくとも最近はそのいう、上下揃いのセットものばかり買ってるんだけど。

珍しいっていうから見下ろしてみたブラは若草色で、カップの部分には黄色や緑の系で花模様が刺繍がされてなんとなく春っぽい。俺が着るのは大抵白かピンクとか、薄い色ばかりだから確かに珍しいかも。

胸の真ん中のところにはやっぱり若草色の小さいリボンと花飾りがついてるんだけど、ロイはいつもみたいにその花飾りのところにキスをして、もう一回笑いながら俺に言った。

「かわいいね」

嬉しい顔にも色々種類があるけど、今俺の上に覆いかぶさってるロイの顔は、例えるならあれだ。ケーキを貰ったときの女の子。

三十過ぎたおっさんにそんな例えはおかしいかもしれないけど、女の子がうわー、って歓声あげる時みたいな、そんな顔なんだ。本当に。

「君の肌は白いから」

ロイの指はシャツのあわせを両側に開いて、ブラの縁飾りのレー

スをつうつとなぞる。指はそれからカップの中心のリボン飾りのところに下りて、谷間なんてほとんどないその周辺をひっかくみたいにして滑る。

「濃い色も良く似合うんだね」

俺はこれに結構弱い。指で押されたレースが肌をこする感触は別に痛くはないんだけど、何度も繰り返されるとだんだんむず痒くなってくる。

ロイと俺が初めてこういう関係になったのは俺が十三歳になったばかりの頃で、女に不自由したことがないっていうロイと違って当たり前だけどまだ男なんて知るわけがない年の俺の体は痛い以外になんにもわからなかったくらいなのに、今じゃこうやって触られて気持ちのいいところとか、もっと触って欲しい、って思う場所がたくさん出来た。露骨に言えば性感帯ってやつ。

膝小僧とか、ふとももの本当にぎりぎり足の付け根のところ。二の腕の内側の柔らかいところ。わき腹。耳。

ちよっと前までは欠けた右腕と左足を補う機械鎧と生身の繋ぎ目のところなんていうのもあったけど、半年前からそこは何事もなかったみたいになっちゃった生身の手足がついてる。

その、生身の体を取り戻した半年前まで俺は色々あって男として暮らしていた。旅続きの上に、男ばかりの軍隊に関わるとなればその方が危険も少なかったから。

幸か不幸か体は発育不良気味で胸はぺったんこだったし、なにより無骨な機械鎧にはあんまりにも不似合いだから、女性向けの、レース飾りのついた下着なんて使うようになったのはほんとに最近だ。以前は下着代わりに胸を固定するボディスーツをつけて、それからタンクトップと上着を重ねてた。まんがいちにも女つてことがあれば困るからつてことで重たいスーツを外すことはほとんどなくて生身の体に戻ってからはしばらくは体が軽すぎて落ち着かないような感じもしてたくらい。

そんな、ちつとも色気なんてない子供におったててるロイって変態

なのか、結局男って肝心の下半身の器官があればそれ以外のことはあんまり気にしないのかなって思っ、一度そう言ってみたらロイはすごく変な顔をした。

「君がかわいい下着を着てくれるというならそれは嬉しいが、今のままでも十分だよ」

今のままでもいいけど、可愛い着た方が嬉しいってことらしい。だから将来やるべきことリストの中に女物の下着を着てみる、っていうのを付け加えたのが十五歳になる直前。

アルの全身と自分の手足を取り戻すにはそれからまた二年かかって、それでようやく女物の下着を買って着てみせたらロイはすごく喜んだ。多分ロイに尻尾がついてたらぶんぶん風が起こるくらいの勢いで振ってたと思う。

まだ男として振舞ってた頃、軍の男の人ばかりで女の下着の話になったことがあった。

ロイとそういう関係になる前の本当に子供の頃だ。五・六人いた男の人たちが、上と下は揃いじゃないといけない、とかパステルカラーがいい、とか胸の真ん中のところにリボンかお花がついてるやつがいい、とか、みんな揃って同じことをいうからその時の俺は呆れたんだ。別に自分が着るわけじゃないのにそんなにこだわることないよな。

だけど、初めて買った下着は結局、大人たちのいうところの「男のロマン」の条件を備えたやつだった。真っ白でレースで胸の谷間のとくにリボンと花がついてるの。

それをロイは呆れるくらい何回もかわいいかわいって言って、とにかくすごく嬉しそうな顔するから、そうしたら次もそういうの着てみようかなって思うようになる。

初めて女物を買う時、適当に飛び込んだらすごく親切にしてくれたランジェリーショップのお姉さんのところにまた行って、これも一昨日その店で買ってきたものだ。

六年がかりの旅が終わってほっとしたせいか、俺の体は急速な勢

いで成長していて、身長も少し伸びたけどとにかく横の変化がすごい。太ったんじゃないくて、女性の丸みがついてきたんだってランジエリーショップのお姉さんは教えてくれた。成長期はこまめにサイズを測ってちゃんと体にあった下着を使わないと体の線が崩れるんですよ、って言われて月に一度は通ってるんだけど、その度に数字は増減して、結局毎月新しい下着を何セットか買う羽目になる。最初の頃はやっぱり慣れないし、いきなりレースびらのやつ買うのは恥ずかしくて、地味なスポーツタイプとかも買ってたんだけど、レースがついたふりふりのやつの時と、飾りも素っ気もないのを着てる時じゃロイの表情が分かりやすいくらい違って、気がつけば今はロイが喜びそうなふりふりとかひらひらのかわいいのばかり買ってる。

下着だけじゃない。

マニキュアとかコロンとか、化粧：色つきのリップを塗るだけで、俺がほんのちよつとでも女の子らしいことをやってみるとロイはすごく喜んで、褒めてくれる。

ストッキングは窮屈だしヒールはふらふらするし、マニキュアはすぐ剥げちゃうし、マスカラも口紅もべたべたして、はつきり言ってる好きじゃない。だけど、そういうおしゃれがどんなにちよつとしたことでもロイはすぐに気がついて似合うよ、かわいいよ、って言うてくれるんだ。

三十過ぎた男が未成年の俺にかわいいかわいい言ってるのって変態っぽいけど、でもいつもの企んでるような含み笑いじゃなくて、本当に嬉しそうににこにこ笑ってくれるから、だから俺も面倒だけど女らしい色々に挑戦しちゃうんだ。

周囲の人はロイが俺に惚れ込んでるんだっていうけど、俺だってロイが笑ってくれると嬉しくて、ロイが笑ってくれることを期待して下着を選んでる。おしゃれをする。

これがいわゆる、恋人の色に染まるってやつだとしたら、それはとっても嬉しい。

嬉しいって思うけど、俺はロイみたいに素直に表情に出せないから、代わりに胸元にあるロイの頭をぎゅって抱きしめた。

エド？、って疑問形で名前を呼ぶくちびるの動きとか息とか、肌にあたってくすぐったい。

だから笑っちゃ俺の顔も、ケーキを貰った女の子みたいな顔だったら、いいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0541n/>

ドルチェ（FA/RE/g）

2010年10月10日22時09分発行